

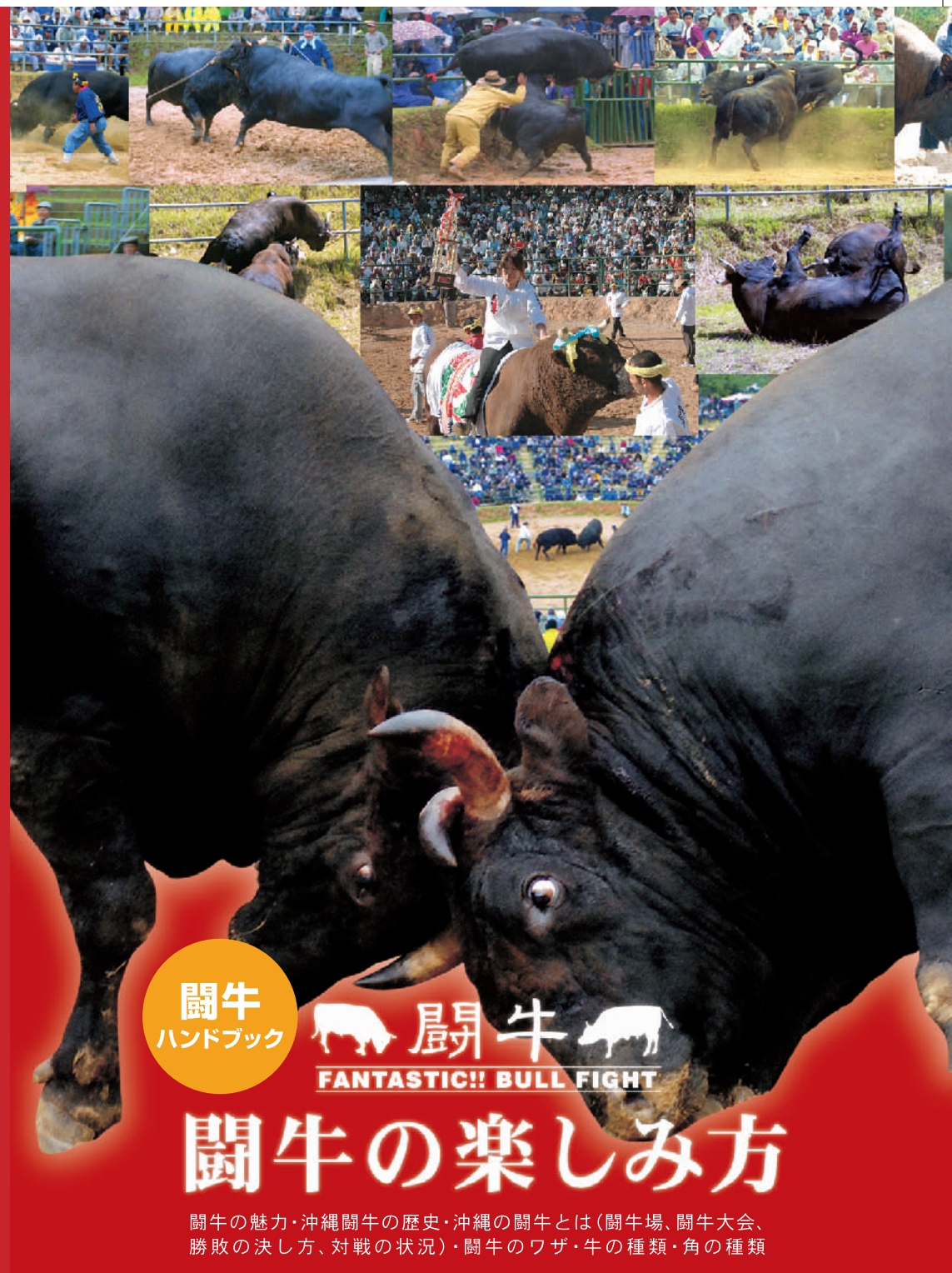


【 発 行 】 うるま市経済部観光課
TEL 098-965-5634 FAX 098-965-5623
<http://www.city.uruma.lg.jp/>

【 監 修・資料提供 】 又吉利一: 沖縄タイムス通信員(闘牛担当)

【 闘牛ホームページ 】 <http://www2u.biglobe.ne.jp/~office21/>

平成19年5月



闘牛
ハンドブック

闘牛
FANTASTIC!! BULL FIGHT

闘牛の楽しみ方

闘牛の魅力・沖縄闘牛の歴史・沖縄の闘牛とは(闘牛場、闘牛大会、
勝敗の決し方、対戦の状況)・闘牛のワザ・牛の種類・角の種類

沖縄県うるま市



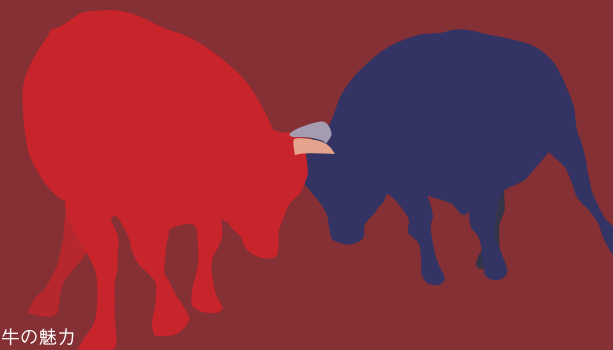
 闘牛 
FANTASTIC!! BULL FIGHT



はじめに

沖縄の闘牛は古くから行われてきており、またほぼ毎週10番程度が組まれる大会が行われていることに示されているように牛の層が厚く、レベルも高いと考えられている。牛と牛が闘うタイプの闘牛は世界の中でも日本が最も盛んであり、その中で年間観客動員数において国内の中でトップクラスとなっている沖縄闘牛は、世界に誇れるイベントであると言える。

「闘牛を活用した観光振興の在り方に関する調査委員会報告書」(内閣府沖縄総合事務局運輸部)より



闘牛の魅力

作家の井上靖は昭和24年、42歳で文壇にデビュー。同年12月、「文学界」に発表した「闘牛」で翌年2月第二十五期の芥川賞を受賞した。また、獅子文六が昭和24年に発表した小説「てんやわんや」に闘牛風景が登場するが、それが大ベストセラーとなり、映画也大ヒットし闘牛を全国に宣伝することとなった。

沖縄では第4回すばる文学賞を受けた又吉栄喜の事実上のデビュー作(昭和51年琉球新報短編小説賞受賞)は「カーニバル闘牛大会」でありその後「牛をみないハーニー」、「鳥袋君の闘牛」、「闘牛場のハーニー」を発表した。

「鳥袋君の闘牛」では「一屯近い体を全力でぶつける。角が頭皮から根こそぎもぎとられるんじゃないかと私を危惧させる角と角との激突。黒いピロードのような筋肉を麻痺させ、目をみひらき、口から泡を垂らし、地鳴りを響かせ、そのように一心に闘い、しかし死なない。勝負がついた直後はそれどころかびっくりするほどあどけない。」ここには深追いをしない、必要以上に相手を傷つけない闘牛の不思議さに作者の分身である私が当惑している様子が分かる。

第二期黄金期を迎えたと言われる沖縄闘牛は、これからも牛と人の哀感が数多く語られ、闘牛をテーマにした小説がまた文壇に登場することだろう。

沖縄闘牛の歴史

沖縄における闘牛の起源は定かではないが、少なくとも明治後期には行われていたことが当時の新聞記事により確認されている。闘牛熱のため製糖作業が遅延し、県が指導に乗り出した村落もあったとの記録が残っているほどである。

戦争により中断の後、昭和22年に大会が再開され、以後スター牛を多数輩出し、一時はテレビ放送もなされるなど、幅広いファンを獲得することとなった。その後レジャーの多様化、都市化の進展に伴う闘牛場の整理等により、一時ほどの人気はなくなったが、現在でも沖縄本島中部地域のまつりの核として行われているなど伝統的な娯楽として定着している。



沖縄の闘牛とは

DO YOU KNOW BULL FIGHT IN OKINAWA?



闘牛場

全体は「すり鉢」状の構造になっており観覧に適している。真中に直径18m前後の円形の対戦場があり、鉄製の柵の付いた土塁がぐるりと周りを囲み、牛の出入り口は1箇所である。

収容人数は闘牛場により異なるが、1千人～6千人である。



いざ出陣。
牛主や応援団の期待を背に受け花道を進む。もっとも緊張感に包まれる瞬間

「通が訪れる待機小屋」



対戦の前（1時間前）に最後の調整をするところが「待機小屋」と呼ばれている。牛の気持ちを落ち着かせるためにブラッシングやマッサージを入念に行う。牛は対戦の接近を感じると気合いが最高潮になり、燃えるような目をし、しきりに体をゆすったりする。待機小屋を見るのが「通」の楽しみであるが、スペースが限られているので要注意。



長年待ち望んだうるま市石川多目的ドームは平成19年5月に落成を迎えた。天候に左右されことなくイベントが開催でき、二階席を含め約4000～5000人収容できる施設。闘牛大会を始め、多方面での活用が期待されている。

闘牛大会

沖縄の闘牛はスペインの闘牛のように人と牛が闘うものではなく、牛同士を一对一で闘わせるもので、対戦中牛の側には闘牛士（勢子と呼ばれている）がいて、闘いを鼓舞する。闘牛士は対戦中の牛にはそれぞれ一人づつ付いているが、対戦場の柵の周囲に待機する闘牛士が交代で行う。

対戦数は10番から13番程度であり、実力下位のカードから順に進む。一つの対戦は数秒で決着するものや30分を超える熱戦などさまざまであり、大会に要する時間も2時間半から4時間と大会ごとに異なる。



2006年春の全島闘牛大会の横綱戦

14の闘牛場があり、夏場に土曜日のナイター開催があるが、ほぼ毎週日曜日に開催されており年間50程度の大会が開催され、延べ4万2千人程度の入場者がある。現役牛は約300頭ほどで、春（5月）、秋（11月）の全島闘牛大会が最も大きな大会である。

大会に出場する牛は肉用牛の中から素質のありそうな牛を選抜して幼少時より丹念に育てられている。最近では優れた闘牛を親に闘牛用の牛を育てることもあり、宇和島、徳之島等闘牛が行われている他地域からのトレード牛も多くなった。



(左上) やったー！ついに頂点。沖縄最強牛の座を射止めた瞬間
 (左下) 堂々の横綱土俵入り！
 (右上) 観客席に飛び込まんばかりのど迫力！
 (右下) 恒例の“くす玉割”で景気つけ

勝敗の決し方

本部席の審判団が判定を下す。勝敗の基準は原則として逃げた方が負け。逃げる前に腹取りと呼ばれるワザなどが決まり動けずにギブアップの状態となった場合、審判団が速やかに勝敗を判断し、闘牛士が直ちにひきはなす。

ヤグイ

闘牛士は「ヤグイ」と呼ばれる掛け声を発し、牛を叱咤・鼓舞する。うまい闘牛士ほど勝機に「ヤグイ」を巧みに入れ、勝利に導く重要な役割を持つ。対戦中の闘牛士の疲労は相当なものがあり途中交代で行く。闘牛士は約30人程度。闘牛の進行に欠かせない存在であり関心を持って見る必要がある。



「舌だし」敗走の一步手前である。



勝負は一方が逃げ出すことで決まる場合が多い。

対戦の状況

牛は約10分程度で次第に疲れてくる。疲れの度合いは 1、発汗 2、脱糞 3、放尿 4、舌だしの順で進む。「舌だし」の状態になると殆どの牛が力尽きて敗走することとなるが、2～4の状態が先に現れた方が負けの確率が高い。牛も性格が千差万別で、闘牛場で様々な仕草、態度を見せる。闘うことへの恐怖心で、闘牛場へ入るや否や相手牛のまわりをぐるぐる回り、しきりに降参の意思表示をする牛。（この場合不戦敗）。相手を油断させておいていきなり突っかけ有無を言わずに決着を図ろうとする牛。相手の角でたたかれて頭部や顔面にキズを負いながらもじっと耐え、相手の疲れをまって逆転の機をひたすら伺う牛。激しい攻撃を1～2分一方的に続けたかと思うと急に脱兎のごとく逃げ出す牛。これらを参考に想像力を働かせ観戦するのが闘牛を楽しむ一番の方法だろう。



一本背負いが見事に決まる。



勝利の記念撮影。



闘牛の「ワザ」

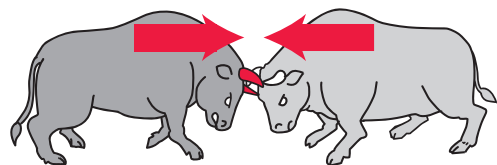
A TECHNIQUE OF BULL FIGHT



ワザの種類は基本的には次の5手。腹取り以外は勝敗に直結することが少なく、複合、反復することによって相手を疲れさせ、動揺させ、敗走させることができる。他に「かつぎ上げ」や「打ち倒し」などの大技がある。

TECHNIQUE NO.1

押し

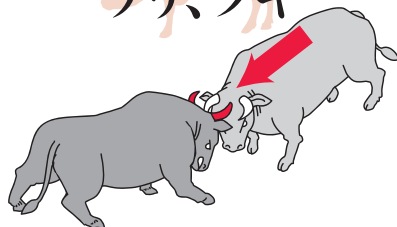


正面から渾身の力を込めて直線的に相手を押すこと。押しだけで勝負が決まることは希であり、体勢を崩した後続く腹取りでの決着が多い。



TECHNIQUE NO.2

ワリ、ツキ

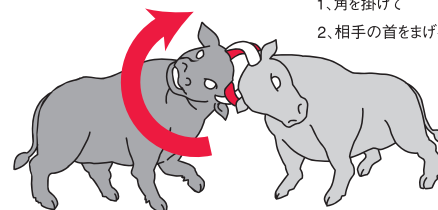


相手の肩間めがけて角を打ち込むこと。体重が乗った強烈なワザが決まった場合はかなりの威力となり、間をおかずに相手を敗走させることが出来る。「ワリ牛は逆にワラれると弱い」の例が多く、数が減っている。ワザに移る前の有効な一撃として、ほとんどの牛が併用する。



TECHNIQUE NO.3

カケ



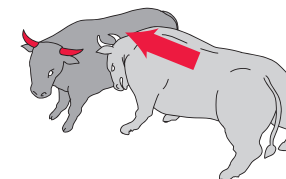
- 1.角を掛けて
- 2.相手の首をまげる

角を掛けて相手の首をまげること。もっともよく出るワザだ。相手の首が90度近くも回転し天井を向いたままになることもある



TECHNIQUE NO.3

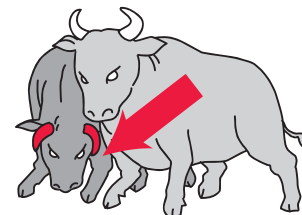
腹取り



勝敗に直結する決定力を持ったワザ。頑強な牛は多少のケガで闘いを止めることはないが腹部だけは別。腹部に危害を加えられそうになると一目散に逃げ出すのが普通。このワザを得意とするのは敏捷で体全体にバネがあり瞬発力豊かなタイプで、花形牛となることが多い。

TECHNIQUE NO.3

持たせ込み



相手に体重をかけるワザ。相手の押し込みや掛けを避けるため防御目的にやることが多い。しかし中にはこれを積極的に仕掛け相手を疲れさせる脳ブレイをする牛もいる。





牛の種類

A KIND OF BULL



牛の種類



沖縄産を中心とする黒毛和種、岩手産を中心とする日本短角種（南部牛）、八丈島産を種とする褐毛和種が中心で、これらとホルスタインを掛け合わせた雑種も相当数存在する。

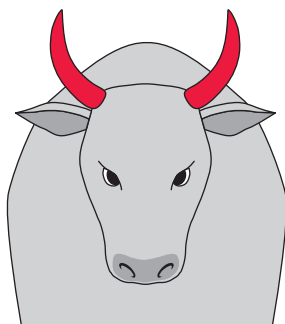
（左上）黒毛和種。最も多く見られる地牛で写真は八重山産（右上）日本短角種【南部牛】岩手・新潟に多く、大型牛が多い。（左下）褐毛和種。明るい茶色で八丈産と呼ばれる。（右下）交配種。○○バンドの呼称で人気がある。

角の種類

牛の角は最大の武器であると同時に、人間の顔と同様牛の個性である。良い角を持つ牛は幼少の頃から注目される。

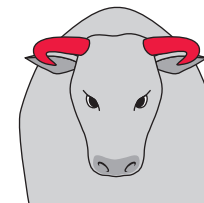
トガイ

前方45度前後もしくは垂直気味でカーブして鋭く尖った角。ワリ、カケのワザに適し、防御にも効果満点。最も好まれる角である。



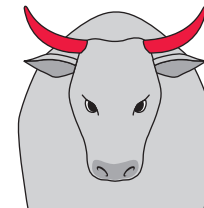
カブラ

水平か下向きに曲がった角。相手と組み合ったとき角先が相手の顔面に当たり相手は闘いにくくなる。側面からフック気味にワルことを覚えた牛は攻撃に幅が出て実力牛になることも多い。



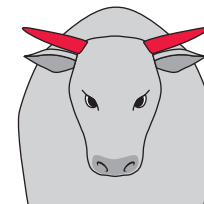
ヒラー

かなり開き気味にはえた角。カケ技を得意とする牛が多く、相手の消耗を待って勝負に出る持久タイプ。



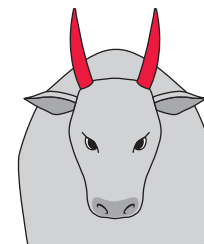
ボース

横にまっすぐに伸びた角。闘いには決して有利とは言えず、ハンデを捕うために闘魂あふれる「熱闘派」が多いが、この角を持つ牛の数は少ない。



タッチウ

ほとんど真上に伸びた角。ツキ、ワリに適し相手にもカケられにくい形。勢いに乗ってどんどん勝ち続けるタイプが多いが、一旦負ければズルズルと立ち直りが遅いのも特徴。



ヒーゲ

左右不揃いにはえた角で数は少ない。ワリ技を出したとき不揃いのため左右の当たる角度が異なり効果てき面。これを多用すれば戦力アップとなる。

